**西田　貘 （にしだ・ばく）**

**１、プロフィール**

歌人。本名西田一義。残されたノートにあった短歌、詩、日誌が１冊の遺稿集に収められた。社会主義を学び、死と病と生を文学に昇華させた作家。

＜生没＞

1921（大正10）年９月１日 ～ 1947（昭和22）年８月17日

＜代表作＞

西田貘遺稿集『流れ』

＜青森との関わり＞

青森市大別内に生まれる。軍属として中国へ渡った後、病を得て帰郷。療養のかたわら短歌、詩作を行う。

**２、作家解説**

作者の名は知らずとも、作品に触れた者はその清冽な流れと奥深さに引きこまれ、長く記憶にとどめるのである。

西田貘は大正10年９月１日青森市大別内に生まれた。青森師範学校附属小学校高等科卒業後、県庁給仕となる。昭和13年春上京、軍属として中国へ渡るが、結核により内地送還され帰郷する。この頃短歌を作り、映画評などを行う。社会主義運動に関心を持ち、共産党員として熱心に活動する。しかし病気は一進一退、西平内の陸軍病院療養所に再入所することになる。

昭和21年12月胸の神経挫滅の手術後の日誌に「絶対安静をやった二、三日後に、僕としてはずい分得る所があった。西田貘として新しく発足しよう」と記し、自己発現への意欲を新たにしていた。翌年１月盲腸手術をするが、悪化。５月帰郷し、８月17日26歳で永眠。直前まで社会主義の勉強を欠かすことがなかったという。

昭和20年９月４日医師に余命を宣告されての日誌。「我が人生それだけのものであるならば、３年が１年、１年が半年でも、ただ一つ残されたものが死への道であるならば、勇敢にそして静かに入らねばなるまい。生も慾せずまた死も慾せず、また生死を否定するものでもない。すべて流水流雲の姿であろう。」

この言葉通り、生きて２年のちこの世を去ったのである。

17回忌の昭和39年、弟西田守義と北彰介により遺稿集『流れ』が発行され、西田貘という一人の詩人が蘇生することになる。自身の生と死をみつめ続け、真撃に生を終えた作家はまさしく「流水流雲」の心の軌跡を残したのである。

参考　西田貘遺稿集『流れ』（北彰介「西田貘について」）

 　　　　　小野正文『北の文脈』

**３、資料紹介**

〇西田貘遺稿集『流れ』

図書

1964（昭和39）年１月15日

250mm×180mm

４冊のノートに記された遺稿をまとめたもの。「雑草」と題し短歌230首「光の中を」として詩16篇。「日誌より」には昭和20年９月～22年３月の抜粋。他に発行人西田守義「兄のこと」編集者北彰介による「西田貘について」を収録している。84ページ。